九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

筑豊石炭産業近代化の先駆者杉山徳三郎の事績と関連遺産

長弘，雄次
九州共立大学

https://doi.org/10.15017/16977

出版情報：エネルギー史研究 ： 石炭を中心として. 25, pp.33-46, 2010-03-23. 九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：
権利関係：

【紹介】筑豊石炭産業近代化の先駆者杉山徳三郎の事績と関連遺産

長　弘　雄　次

一．はじめに
二．ポンプ揚水への道のり
　一）筑豊石炭産業での機械排水の進展
　二）杉山徳三郎の近代化への取組み
　（一）杉山徳三郎の筑豊に至るまでの生い立ち
　（二）筑豊炭田の目尾炭坑への進出
　（三）スペシャルポンプについて
　（四）目尾炭坑での開坑運転の概要
三．杉山徳三郎の長崎における活動
四．目尾炭坑の譲渡
五．ポンプ揚水に成功した竪坑の位置の検証
　一）杉山徳三郎の鉱区選定の場所
　二）残された写真による調査
　三）坑口位置の確認
六．坑口位置確認の発掘調査
七．目尾炭坑跡・旧伊藤伝右衛門邸付近の近代化遺産
八．むすび
　・近代化に貢献した事績年表
　・参考文献

一．はじめに

明治初年筑豊炭田は人力によって石炭が採掘され、露頭から石炭層を掘りさがり、水が出て揚水に行きつまると、坑口を新たに開いて採掘する状態で、石炭生産の最大の隘路であった。

この解決に蒸気機関によるポンプ揚水が試みられたが失敗が繰返された。この難関を杉山徳三郎が目尾炭坑で一八八〇（明治一三）年に試運転をへて、翌一四年にポンプ揚水に成功し、筑豊炭田の近代化の道を開いたのは画期的なことであった。

杉山徳三郎がポンプ揚水の成功に至った事績とポンプを設置した目尾炭坑跡の確認、周辺の近代化遺産の連携により、筑豊炭田の石炭産業近代化遺産の価値を高めるものとし、現地調査を行った内容について取りまとめた。

二．ポンプ揚水への道のり

一）筑豊炭田石炭産業での機械排水の進展

九州では一八六九（明治二）年に高島炭坑の北渓井坑の坑底で、外人教師の指導により水揚使用したのが初めといわれているが、その種類は明らかでない。

筑豊では日本人の手で機械化に挑戦したのが特徴でその流れを記述する。[1][4][6][9][15][16][17]

① 一八七五（明治八）年暮れ長崎の造船技師片山逸太が田川郡糸田村の中元寺川のほとりで蒸気ポンプによる排水実験を行ったが、一時揚水されたもののポンプは止まり失敗に終わった。麻生、貝島、安川などの姿もあり、近辺からの見物人が一万人も詰めかけたといわれ、関心の深さが窺われた。

② 一八七六（明治九）年六月、貝島太助が二、九〇〇円で長崎から汽船用の蒸気機関を購入、直方炭坑に据え付けたが、失敗に終わった。

③ 一八七八（明治一一）年帆足義方が香月炭坑に蒸気機関を据え付けたが失敗した。

④ 一八八〇（明治一三）年一二月八日杉山徳三郎が目尾炭坑でスペシャルポンプの試用に成功し、明治一四年四月目尾炭坑で機械排水に成功し、その後各坑続々これにならう。

二）杉山徳三郎の近代化への取り組み

（一）杉山徳三郎の筑豊に至るまでの生い立ち

杉山徳三郎は一八三九（天保一〇）年一〇月一八日、長崎奉行所の地役人、杉山弥三郎の次男として現長崎市内に生まれた。一八五七（安政四）年一八歳のときに長崎海軍伝習所に二期生として入所した。一期生の勝海舟や蘭人教師カッティンディケなどから薫陶を受け、砲術、蒸気理論と運用技術などを学んだのち、官営長崎製鉄所で働いた。[1][9]

一八五八（安政五）年一〇月には長州藩の伊藤博文が上司の来原良蔵と共に来崎し、翌年の六月まで滞在してこの伝習所で学んだが、この二人を教育した中に杉山徳三郎がいた。[1][9]

徳三郎は、一八六九（明治二）年当時兵庫県知事であった伊藤博文との再会を機に兵庫製鉄所（のちの川崎重工業）の建設に参画、さらに一八七五（明治八）年から横浜製鉄所（のちの石川島重工）の経営にも携わった。[1]

（二）筑豊炭田の目尾炭坑への進出

新たな事業を模索していた徳三郎は、一八七九（明治一二）年に長崎博覧会でスペシャルポンプを見て、石炭産業の将来に目をつけ、蓄積した蒸気機関の技術を用いた石炭産業への進出を決意した。

徳三郎は適当な鉱区を得るために九州の各地を調査し、筑豊に入って調査の結果目尾を一等地と決定して、明治一三年五月一二日に三区合計

八万三九七五坪の借区の許可を取得した。

注）一　工部省鉱山課『鉱山借区一覧表（明治十六年十二月三十一日調）』

（杉山徳三郎　杉山謙二郎著より[1]）

注）二　古河鉱業一〇〇年史より[5]

「目尾坑は明治七年、村民瓜生伊三郎、高野正蔵の借区となったが、九月八日杉山徳三郎の所有に移った。かれは一四年ここに坑内ポンプ・巻上機を据え付けて運転を開始し、機械的創業の先鞭をつけたのである。市兵衛はこれを二九年一一月譲り受けた」とあるので、もっと早い時期から協議があったのかも知れない。杉山謙二郎も触れている。

工部省鉱山課『鉱山借区一覧表（明治十六年十二月三十一日調）』

郡名	村名	字	鉱種	坪　数	番号	借区人	許可年月
穂波	目尾	山ノ谷	石炭	2750.0	官　350	杉山徳三郎	13年５月12日
同	同	同		13000.0	借 1530	同　人	13年５月12日
同	同	同	石炭	45225.0	官　337	同　人	13年５月12日

（三）スペシャルポンプについて[1][7][18]

スペシャルポンプは英国タンギイ社製でまた発明者の名によってカメロンポンプとも呼ばれた。構造的には蒸気機関の気機部分とポンプ自体がピストンによって直結しており、機関内のピストンの運動がそのままポンプ内で吸・排水運動を起こし、同時に半動する弁の助けで排水を行う。したがって地上の蒸気機関からパイプで蒸気を受ければ何処からでも稼動出来た。徳三郎は英国から二台購入して据え付けた。

（四）目尾炭坑での開坑運転の概要（筑前炭山日記より）

徳三郎の筑豊での開坑の状況は、徳三郎の日記「筑前炭山日記」（明治一三年、一四年）の中に詳細に記されている。その日記は、第二次大戦後の混乱によって廃棄されたが、開坑、出炭等に対する部分が写真撮影され、ネガとして残され、九大記録資料館（旧石炭研究資料センター）に残されている。その主なものは次の通りである。[1]

・徳三郎等四名（徳三郎、松太郎（甥）、茂、大工専治郎）は明治一三年一〇月七日に長崎から目尾にはいり二四日から竪坑を掘り始めた。

・月末に用意していた機械類が川船で目尾に到着した。蒸気機関、蒸気缶、スペシャルポンプ等大掛かりなもので、三回にわたって目尾に運びこんだ。

・一二月八日に徳三郎は竪坑を掘り進みながら、蒸気缶、スペシャルポンプの試運転を行って好結果を得た。片山逸太が見に来る。九日スペシャルポンプの試運転申し分なし。小竹より見物人来る。

・四月に入ると巻上機の組み立てが完了、スペシャルポンプと併用して水揚げを行い、総ての体制が整ったのは四月一三日のことである。四日間の休日をとりその後本格的な掘削にかかり、五月二一日に七ヘダ三尺炭に到達した。

・明治一四年に深さ一四〇尺（四二m）で四尺炭、明治一九年には深さ一八三尺（五五m）で五尺炭、明治二五年には深さ一九三尺（五八m）まで掘って底三尺に達した。竪坑は幅八尺、長一丈一尺（二・四m＊三・三m）の長方形であった。

・徳三郎は斜坑・竪坑に関わらず蒸気力を動力源として、排水、人・

物資の昇降、石炭の搬出を総合的に展開したのであった。

※明治一九年末の目尾炭坑の状況について三池坑の技術者吉原政道の長崎県下・福岡県下炭山報告「工學會明治二〇年」の内容の主なものを掲載した。[11]

○竪坑は深さ一八五尺（五六m）、幅八尺長（二・四m）、一丈一尺（三・三m）、櫓は四本柱で上部に至って互いに傾斜する。高さ三〇尺（九m）溝車の径六尺（一・八m）巻胴の径五尺（一・五m）。

○運搬は三六〇kg炭車、木道に帯鉄をはめ込み、坑口より川路積込場までの距離一一〇間（二〇〇m）

明治一三年～一四年の日記を下表に記述する。[1]

杉山謙二郎は曾祖父徳三郎の目尾炭坑でのポンプ成功を次のように記載している。

石炭史の研究家久保山雄三は「目尾炭坑に於いて初めて十分な効果を奏し得たことは、斯業大革新を促すことになり、その後各炭鉱は競って所謂文明の機械を設置し、かくして従来の人力のみによって採掘された筑豊の野は、爾後数年を出ずして近代機械鉱業の色彩を発揮するに至った」と説明されている。

また農商務省の「第三次農商務統計表（明治二一年一〇月）」によると、わずか五年後の明治一九年には福岡県の主要炭坑二七坑のうち、その六割、一五坑が蒸気機関を設置しており、その半数は二五馬力以上の大型の出力を有していた。

このような中で、徳三郎は開坑時と同じように自分の蒸気

筑前炭山日記（明治13年～14年）

明治13年	
日　付	内　　容
10月7日	徳三郎等４名（徳三郎、松太郎、茂、大工専治郎）前日海路から博多に着き、当日目尾に到着。
24日	人夫３人で竪坑を掘り始める。
31日	川船で運んだ機械類の荷揚げを終了。
12月１日	蒸気缶を試す、三個とも上出来である。
８日	スペシャルポンプを試して好結果を得る。片山逸太が見に来る。
９日	スペシャルポンプの試運転申し分なし。小竹より見物人来る。
11日	竪坑用材木の引合いを行う。
13日	森義平が金技仕事に取り掛かる。片山、松本潜が来る。真石の存在に言及する。工部大学校生徒石橋来所。
16日	瓜生治助とともに郡役所に行き借区権3枚を受け取る。
17日	香月に木材見分に行く。帆足義方のパイプ借用申込みを断る。
18日	坑口より鉄道用路の願書を出す。
19日	片山逸太にポンプ１台を450円で売り渡す。
22日	長崎に機械が到着する。帰崎の上1240ドルを払う。

明治14年	
日　付	内　　容
１月１日	着炭・出炭の上は「筑前穂波郡之礦業を繁栄」させることを誓う。
２月26日	再び目尾に機械を陸揚げする。
３月１日	第３回目の機械陸揚げ。
４日	森清に割増金を払う。真石を掘り抜ける。
10日	ドンキーポンプを試すが、この後１ケ月これの「水入れ」調整に苦労する。
11日	第1回費用計算。
30日	中之島炭坑仏人が見分に来る。
31日	ナンバ捲き人夫が休み、機械での水揚げ用意に努力する。
４月１日	第２回費用計算。
４日	巻機械組立終了、掘方始める。然し水桶が小さい。
５日	捲上機を使用して昼夜堀り下げる。
７日	スラセ機械組立。
８日	ナンリ、スラセ金物を取り付ける。
13日	全ての準備が整い４日間掘方休む。
５月19日	先端部で錐を突き入れたところ粉炭を見る。
21日	着炭、７ヘダ３尺を採り、「炭美也」と記す。然し急激な出水で大いに苦労する。
25日	10吋スペシャルポンプを投入する。
６月５日	木枠21枠を入れる。掘り進む。
11月４日	兵庫高見へ河船にて送炭。

機関技術の公開と普及に努め、炭坑主達がポンプを設置する際にはその紹介やインストラクターの役目をはたしたという。

麻生太吉、安川敬一郎など同業者は徳三郎に教えを仰ぎ、ポンプの購入を徳三郎に依頼したという。そのため筑豊炭田発展の大きな力になった。

以上の結果、九州の中でも高島、佐賀地方を下回っていた出炭量は明治二一年には完全に抜きさり、全国出炭の割合は明治一四年の二二％が、二一年には二八％、二〇年後半には四〇％を越え、明治三〇年代には五〇％を越す我が国最大の産炭地に成長したのである。

そのため捲上機、揚水ポンプなどの鉱山機械を製作する鉄工所が明治二〇年代に直方で相次いで設立され、明治三一年には工場数四〇を数え、飯塚には明治二九年幸袋工作所が発足して伊藤伝右衛門が初代社長に就任し、逝去する昭和二二年まで社長として炭坑の石炭生産を支えた。これらは北九州の八幡製鐵所の誘致、原料部門の製鉄二瀬炭鉱の開発に繋がって行った。[10][19]

三．杉山徳三郎の長崎における活動

一八八五（明治一八）年福岡県の「石炭坑業人組合準則」の発令により筑前国豊前国（筑豊）坑業組合が設立されたとき、穂波郡の組合設立を主導して組合リーダーの一人となり、若松の石炭一括販売人を引き受けた。しかし炭価の下落もあり明治一九年終わり頃には廃止になったが積極的に業界のリーダーとして活躍している。[14]

徳三郎は明治二二年末の選定鉱区三四鉱区では二七番の目尾鉱区二〇二、九六〇・〇坪を取得しており、当初の八三、九七五坪より増加している。[4][6][13]

徳三郎は明治二一年ごろ長崎市外に広大な邸宅をたて、明治二四年に兄友之進の長男の杉山松太郎に一任して、母の菩提を弔うために徳三寺の建立に意を注ぐとともに明治二七年に目尾炭坑を一五〇〇〇円で松太郎に売り渡したという。[1] 徳三郎と松太郎との間を取り持ったのが松本潜と伊藤伝六（伊藤伝右衛門の父）であった。松太郎は明治二九年一一月に古河市兵衛に売却した。

長崎では松島炭坑の開発や財界活動を行い、一九三〇（昭和五）年六月一九日に永眠、九一歳の長寿を保った。[1]

四．目尾炭坑の譲渡

古河鉱業創業一〇〇年史によれば、明治二九年に勝野坑、沓抜坑、目尾坑、塩頭坑を買収した。勝野、沓抜両坑は福岡県鞍手郡勝野村にあり、鉱区は前者三八万坪、後者四万七〇〇〇坪。目尾、塩頭両坑は同県嘉穂郡大谷村にあり、鉱区は前者二一万五〇〇〇坪、後者五万坪であった。市兵衛は四坑を統一して経営に当たった。これが古河目尾炭鉱である。

勝野坑は明治二二年七月以来日本郵船会社が経営していたものである。塩頭坑は日本郵船の近藤廉平が明治一三年一〇月借区出願をなし、二六年七月近藤および杉山松太郎の共同鉱区とし、二九年四月開坑していたものである。

目尾坑は明治七年、村民瓜生伊三郎、高野正蔵の借区となったが、杉山徳三郎の所有に移った。かれは一四年ここに坑内ポンプ・巻上機を据

え付けて運転を開始し、機械的操業の先鞭をつけたのである。市兵衛はこれを二九年一一月譲りうけたことは前述した。

沓抜坑は森清高吉ほか五名の借区であったものを、明治三〇年に買収した。目尾坑は炭量枯渇で昭和四年六月休止、塩頭坑は昭和五年一一月休止した。目尾浜生神社に杉山徳三郎寄進の奉納額、小竹貴船神社に杉山松太郎寄進の狛犬がある。

明治三十年五月発行の高野江基太郎著「筑豊炭砿誌」に記載された目の尾炭坑（明治三十年九月現状）から記載する。[2]

坑主　古河市兵衛　　鉱業代人　安達仁造

位置　大谷（おおや）村大字目の尾（現在飯塚市）

借区坪数　二十一萬五千三百三十三坪

沿革梗概　本坑は筑豊四郡の各坑中最も有名なる老坑にして杉山徳三郎氏の手によりて開坑され明治十三年他坑に率先して蒸気機関の据付けをなし始めて機械的採掘の功を完くせり爾来杉山氏の所有として久しく採掘し来たりしも明治二十九年十一月中現坑主古河市兵衛氏之を買い受け勝野炭坑と共に安達仁造氏の所管とし引続き採掘事業を営めり

事務員以下雇員　六十一人

坑夫　一百三十人内外とす坑夫は多く村坑夫にして皆付近の民家に住みし日々出稼ぎするものなり本坑は坑夫納屋の設けなし

坑夫の賃金　一日平均六十銭

運搬　本坑は近く鉄道線路に接し坑口より汽車積込場迄僅に二十間に足らざれば其の運炭の如きも只汽車積込賃三十銭（一萬斤）を要する外若松迄の運賃を要するに過ぎずと云う。

※幸袋線（目尾炭坑の石炭は幸袋線が敷設されて、水運から陸運に切り替わった）

一八九四（明治二七）年一二月二八日開業（筑豊鉄道）小竹～幸袋

一八九七（明治三〇）年一〇月一日（合併）九州鉄道

一八九九（明治三二）年一二月二六日（貨物支線開業）幸袋～潤野

一九〇三（明治三六）年一一月二八日（貨物支線開業）目尾分岐点～目尾（駅新設）

一九六九（昭和四四）年一二月八日（路線廃止）小竹～二瀬、貨物支線

杉山謙二郎によれば、目尾坑は明治二五年以前のある時点で第二坑である斜坑、二五年以降に第三坑である斜坑と竪坑の三本で操業していた。明治二九年以降買収した古河鉱業は後に徳三郎が初めに掘削した歴史的竪坑を排気竪坑として、第三坑を通行斜坑道として活用したとある。[3]

五．ポンプ揚水に成功した竪坑坑口の位置の検証

一）杉山徳三郎の鉱区選定の場所

杉山徳三郎が筑豊炭田に鉱区の調査に入ったのは明治一二年～一三年の頃で、目尾を一等地と決定したのは、[12] 東に遠賀川の支流嘉麻川があって、南北には丘陵が連なるまさに筑豊炭田の中央部に位置する所であると杉山謙二郎は記述している。

前述の通り坑口は遠賀川の中流区域で二〇〇m程度の距離であり、交通に便利な長崎街道筋の飯塚、直方の中間に位置しており石炭生産に何

かと便利な場所であることから、選定されたと推測される。

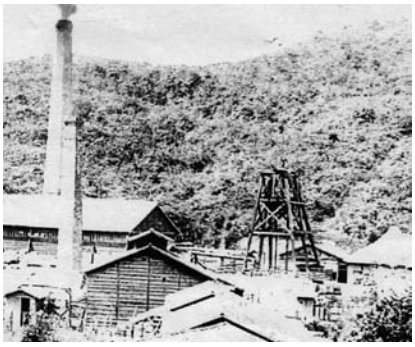
二）残された写真による調査

徳三郎が掘削開始した頃の写真は残っておらないが、古河鉱業創業一〇〇年史、元筑豊鉱山学校資料に掲載された明治三四年の目尾炭坑の写真、それをもとに小竹駅～鯰田駅間（明治二七年七月三日開通）の遠賀川にかかる嘉麻川橋梁通過中の列車から平成二〇年一一月一五日撮影した写真（遠賀川左岸堤防付近）と比較して周囲の山容が似ていることから当時の目尾炭坑竪坑の位置を略確認した。

目尾炭坑の竪坑は明治一四年に一四〇尺の深さで、筑豊炭田で木製竪坑であるが深さ一〇〇尺を越えた竪坑は筑豊で初めてのことであり、蒸気機関、巻上機設置により達成されたことはポンプ揚水成功と共に筑豊炭田の近代化の先駆となった意義は大きなものがある。同竪坑は明治一九年に一八三尺、明治二五年に一九三尺の深さまで深部採掘のため延長されている。当時一〇〇尺を越えた竪坑は、明治一八年に藤棚竪坑（一二〇尺）、新入旧竪坑（一三〇尺）、明治一九年に大之浦竪坑（一二五尺）などがあり、目尾炭坑は当時近代的な先進炭坑であったことが窺われる。[1]

筑豊炭田で竪坑開鑿の先駆は新入竪坑といわれていたが、杉山謙二郎[1]が指摘するとおり正確でなく、明治一四年にポンプ揚水成功の一四〇尺の目尾炭坑の竪坑が初めてと思われ、近代化の先駆者の杉山徳三郎の功績は極めて高いものがある。

明治十年代の約五〇〇の炭坑があったといわれる中で、目尾炭坑の出炭量は筑豊炭田の五～六％を占めたといわれ、有力な機械化された炭坑といわれたことは下表からも推察される。



目尾炭坑竪坑付近拡大図

三）坑口位置の確認

杉山徳三郎が筑豊の目尾炭坑で、ポンプ揚水の成功は知られているが揚水した坑口の位置、遺産の有無を調査した報告は見当たらない。目尾炭坑が採掘終了した昭和四年から八〇年を経過したが、その位置や遺構の有無が分かり、筑豊炭田の近代化の道筋が確認できれば、筑豊炭田の価値が高くなり、大きな一歩を踏み

明治34年頃の目尾炭坑
古河鉱業創業100年史・元筑豊鉱山学校資料

同上位置よりの写真　2008.11撮影

筑豊５郡と目尾出炭高表　１千斤（t）[1]

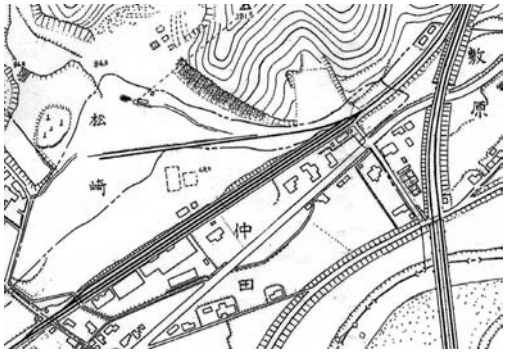
年次	目尾坑	筑豊計	%
16	23,530 (14,118)	428,312 (256,987)	5.5
20	47,000 (28,200)	688,937 (413,616)	6.8

出すことになることが期待された。

六．坑口位置確認の発掘調査

旧目尾炭坑の現在の所在は飯塚市で、飯塚市教育委員会は平成二一年三月初旬から、目尾炭坑跡地の確認調査を開始し、四月二〇日には旧幸袋線の石炭積込線軌道、排水管、石垣、竪坑と思われる跡などが確認され、継続調査することとしている。[20]

目尾炭坑跡の現況を掲載したが、今後の調査により、目尾炭坑跡が「筑豊の近代化遺産発祥の地」の史跡として整備され、筑豊石炭産業の価値を高めることが期待される。



目尾炭坑跡付近地図

七．目尾炭坑跡、旧伊藤伝右衛門邸付近の近代化遺産

明治一四年にポンプ揚水の成功による筑豊炭田の近代化の道を開いた目尾炭坑跡の近くにある旧伊藤邸の中に伊藤商店の事務所を構え、明治二九年に幸袋工作所を創立して伊藤伝右衛門が社長としてポンプ、巻上機などを製造して筑豊炭鉱の中央工場として近代化の促進を図ったこと、炭坑労働者が足を運んで楽しんだ嘉穂劇場など労働者の生活の場としての嘉穂劇場などをセットとしてアピールし、筑豊石炭産業の価値向上のため周辺の近代化遺産について記述する。

一）目尾炭坑関連
- 目尾炭坑の竪坑跡、関連施設
- 水運輸送の遠賀川の川船輸送船着場の調査
- 小竹～幸袋間の石炭輸送の幸袋線・目尾駅
- 小竹～鯰田の筑豊本線の嘉麻川橋梁

二）幸袋工作所跡
- 工場の位置と建物群、製品等

三）嘉穂劇場の内容

四）巻上機台座、住友忠隈炭砿のボタ山

五）伊藤伝右衛門関係
- 製鐵二瀬炭鉱に売却した高雄炭坑など
- 伊藤伝衛門寄進の鳥居、慰霊碑など

について記述する。

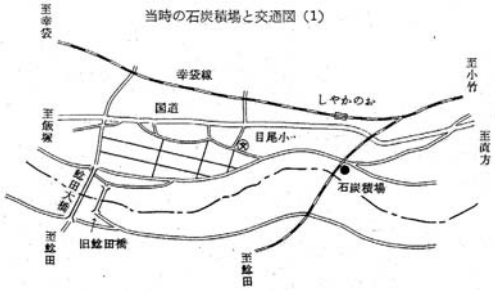
○目尾炭坑の遺産

飯塚市教育委員会で調査中であるので、その進展を見守りたいが、竪坑跡、排水管、石垣などが確認されている。

○水運輸送の船着場は、遠賀川の河川改修が進んでおり確認が出来ないが、幸袋町史の記録を合わせ掲載する。

○幸袋線

幸袋線は小竹～幸袋間が一八九四



目尾炭坑船付場　幸袋町史より

（明治二七）年開業、一八九九（明治三二）年に幸袋～潤野間開通し、製鐵二瀬炭鉱の石炭輸送、一九〇三（明治三六）年に目尾駅が新設された。一九六九（昭和四四）年炭鉱閉山とともに廃止された。

現在道路になっているが、目尾駅付近の線路が確認された。

○筑豊本線小竹～鯰田間　嘉麻川橋梁

小竹～鯰田間の嘉麻川橋梁は明治二六年完成、プレートガーダー式のもので、現在の橋梁は昭和五七年三月に下流側に梅林建設㈱施工、形式ワーレントラスになっている。

○幸袋工作所

明治二九年に旧伊藤伝右衛門邸に近い幸袋町に創立され、伊藤伝右衛門が社長となり、昭和二二年に逝去するまで、筑豊炭田の中央工場としての役目を果たした。

一九六三（昭和三八）年にエネルギー革命による閉山が相次ぎ、業績悪化により日鉄鉱業㈱に譲渡され、製鉄関係機器、コンベヤーなどの産業機械の製造を続けたが、工場老朽化により一九九〇（平成二）年に本社工場総て庄内工業団地に移転、二〇〇三（平成一五）年、「幸袋テクノ」に引継がれた。

跡地は一部工業団地、旧伊藤伝右衛門邸見学の駐車場として利用されている。

○嘉穂劇場

嘉穂劇場は大正一一年一月に木造三階建てとして開場した中座が前身で、昭和三年五月全焼、翌四年五月に再建されたものの、五年七月台風により倒壊、昭和六年木造二階建で「嘉穂劇場」として再建され、国内有数のマス席七二、収容人員一二〇〇名の大衆劇場の殿堂、炭鉱全盛時の歴史的建造物として、平成一四年飯塚市の文化財に指定された。

平成一五年七月の集中豪雨で浸水大被害を受けたが、多くの市民、全国規模の支援で一年後に復旧され、ＮＰＯ法人「嘉穂劇場」として市民とともに興行が続けられている。

平成一八年一一月国登録文化財指定、平成一九年一一月経済産業省の「近代化産業遺産」に認定された。炭鉱労働者が慰安を求めて足を運んだ生活が感じられる近代化遺産である。

○住友忠隈炭砿ボタ山

忠隈炭砿は一八八五（明治一八）年に麻生太吉により開かれ、一八九四（明治二七）年住友に譲渡され一九六五（昭和四〇）年に閉山するまで、住友の九州の主力炭砿として操業された。昭和四年頃からボタ山スキップ巻揚げ施設が整えられ、昭和三〇年頃には三連円錐形の形となった。このボタ山は三つの山から出来ており、高さ一一三～一四一ｍ、周囲二㎞、総容量六七七万立方メートルの巨大な山となり、形が良いので「筑豊富士」の呼び名で人々に親しまれた。現在は木が生い茂っているが、我が国の近代化を支えた記念碑となった。

○巻上機台座

三菱飯塚炭礦は中島徳松が一九一五（大正四）年に飯塚炭礦の前身の大徳炭鉱の経営に着手して、大正七年に中島鉱業㈱を設立、昭和四年に三菱鉱業に譲渡、飯塚鉱業として操業した。一九三六（昭和一一）年に三菱鉱業に合併、三菱飯塚炭礦として最盛期は従業員二四〇〇名、年間七〇万トンを生産したが、昭和三六年閉山した。

大正時代に建設された斜坑の巻上機台座一二ｍが飯塚市指定文化財として連卸の台座とともに残っている。説明板によると、巻上機は蒸気で

運転されたとあるが、昭和四年の石炭時報では、建物の煙突から蒸気が上がっているので確かめられた。前の道路は昭和六三年に廃止された旧国鉄上山田線の跡地である。近代化産業遺産認定されている。

○製鐵二瀬炭鉱遺産

八幡製鐵所の原料部門として一八九九（明治三二）年に製鐵所二瀬出張所が設置され、安川・松本が経営（支配人に伊藤伝六、中野徳次郎）していた高雄一坑・二坑を買収し、明治四三年に中央坑竪坑完成、大正初期年産五〇万～六〇万トン、大正末期一〇〇万トン、戦後年産四〇万トン。一九六六（昭和四一）年に最終閉山した。現在ジャスコ敷地内に正門と事務所の陶板が保存されている。

○旧伊藤伝右衛門邸

筑豊の石炭王といわれた旧伊藤伝右衛門邸は明治三〇年頃に建てられ、明治四四年三月柳原白蓮と結婚後建て替えられ、現在建物延面積一〇一九㎡（三〇九坪）、土地面積七五六八・五㎡（二二九三坪）の建物で、飯塚市が取得し平成一八年九月市の指定文化財となった。現在国の重要文化財として申請準備中で、昨年一一月三〇日経済産業省の産業遺産認定、九州・山口の近代化産業遺産群のひとつとして、平成二〇年一二月一五日に世界遺産暫定一覧表に記載されたが平成二一年一〇月残念ながら構成資産から外れた。しかし一九年四月二八日から一般公開され、一年間で二五万人の多くの観光客が訪れ、現在飯塚市の観光名所として脚光を浴びている。

○伊藤伝右衛門寄進の鳥居、慰霊碑

伊藤伝右衛門が生まれた幸袋には氏神様の許斐神社がある。父伝六が亡くなった翌年の明治三三年九月一二日に許斐神社に大鳥居を寄進した。鳥居の裏面には「明治三十三年九月吉日　継厳父伝六遺志建之伊藤伝右衛門」と刻まれている。

相田の宝幢寺に「相田炭坑死亡者之塔」があり、裏に「明治四十五年五月建之　中野徳次郎　松本健次郎、伊藤伝右衛門」と刻まれており、伊藤伝右衛門の信心の深さが偲ばれる。[20]

旧伊藤伝右衛門邸付近の遺産一覧を掲載する。

八．むすび

筑豊石炭産業近代化の先駆者杉山徳三郎の事績と関連遺産について記述したが、目尾炭坑でポンプ揚水成功、蒸気機関、巻上機の先進的機械システムを導入した杉山徳三郎の功績は極めて高いものがある。

明治の草創時期において、いち早く諸外国の産業技術を取得して、筑豊炭田を舞台として筑豊石炭産業近代化の道を開いた先人の偉業を顕彰し後世に語り継ぎたい。巻末に近代化遺産事績年表、参考文献を掲載した。

目尾炭坑跡・旧伊藤伝右衛門邸付近の関連近代化遺産一覧表

	番号	名　　称	建設　場所	備　　考
目尾炭坑関連	①	目尾炭坑跡	M13、目尾	筑豊初のポンプ揚水、巻上機設置炭坑（杉山徳三郎所有）
	②	目尾炭坑川艀船付場跡	M14、目尾	M14～M27まで川船で輸送
	③	目尾炭坑給水バック	大正時代、目尾	大正時代建設
	④	嘉麻川橋梁	M26、目尾	筑豊興業鉄道　小竹～飯塚M26年開通
	⑤	旧幸袋線	M27	筑豊興業鉄道　小竹～二瀬　M27年開通、Ｓ44年廃止
	⑥	目尾駅跡（操業時）	M36、目尾	M36年開業、Ｓ44年廃止
	⑦	浜生神社奉納額	目尾	杉山徳三郎寄進
	⑧	貴船神社狛犬	小竹町	杉山松太郎寄進
伊藤伝右衛門関連	⑨	旧伊藤伝右衛門邸	M30代、幸袋	近代化産業遺産認定、市指定文化財
	⑩	許斐神社大鳥居	M33、幸袋	伊藤伝右衛門寄進
	⑪	相田炭坑死亡者之塔	M45、相田	伊藤伝右衛門・松本健次郎・中野徳次郎
	⑫	幸袋工作所跡	M29、幸袋	伊藤伝右衛門社長（M29～Ｓ22）
	⑬	幸袋駅跡(操業時)	M27、幸袋	旧幸袋線　幸袋工作所跡前
	⑭	製鉄二瀬高雄一坑跡（操業時）	M32、幸袋	伊藤伝右衛門関係、八幡製鉄に譲渡（明治32年）
	⑮	製鉄二瀬高雄二坑跡(操業時)	M32、二瀬	伊藤伝右衛門関係、八幡製鉄に譲渡（明治32年）
	⑯	製鉄二瀬中央坑跡	M43、二瀬	M43本部事務所、中央竪坑完成
関連遺産	⑰	嘉穂劇場	Ｓ6、飯塚	近代化産業遺産認定、国登録文化財
	⑱	住友忠隈ボタ山	Ｓ初期、穂波	筑豊富士と謳われ石炭産業記念碑として親しまれている
	⑲	三菱飯塚巻上機台座	大正時代、穂波	近代化産業遺産認定、市指定文化財
	⑳	中鶴炭砿（操業時）	T3、中間市	伊藤伝右衛門経営の大正鉱業㈱中鶴炭砿

【参考文献】

（1）杉山謙二郎：明治を築いた企業家「杉山徳三郎」、碧天社、二〇〇五年、一二五頁～一六七頁

（2）高野江基太郎：「筑豊炭礦誌」、丸善、一八九八年

（3）高野江基太郎：「日本炭礦誌」、丸善、一九一一年、二〇三頁

（4）木下亀城：「炭坑の歴史」、日本地学研究会、一九七三年、一六頁～一七頁、五八頁～六〇頁

（5）古河鉱業：「創業一〇〇年史」、凸版印刷、一九七六年、一〇九～一一〇頁

（6）麻生セメント：「麻生百年史」、麻生セメント、一九七五年、一五八頁～一六一頁

（7）坪内安衛編：「石炭史（機械・器具編）」、佐賀県、一九八五年、一〇五頁

（8）長野　暹・坪内安衛編：「石炭史（文書・文献編）」、佐賀県、一九八六年

（9）深町純亮：筑豊の石炭史話（筑豊の大恩人杉山徳三郎）、嘉麻の里、㈱プランニングエン二二三号、二〇〇八年、四二頁～四五頁

（10）近畿大学九州工学部：「筑豊近代化大年表」明治編、一九九九年、三四頁、八六頁、一〇四頁～一〇五頁

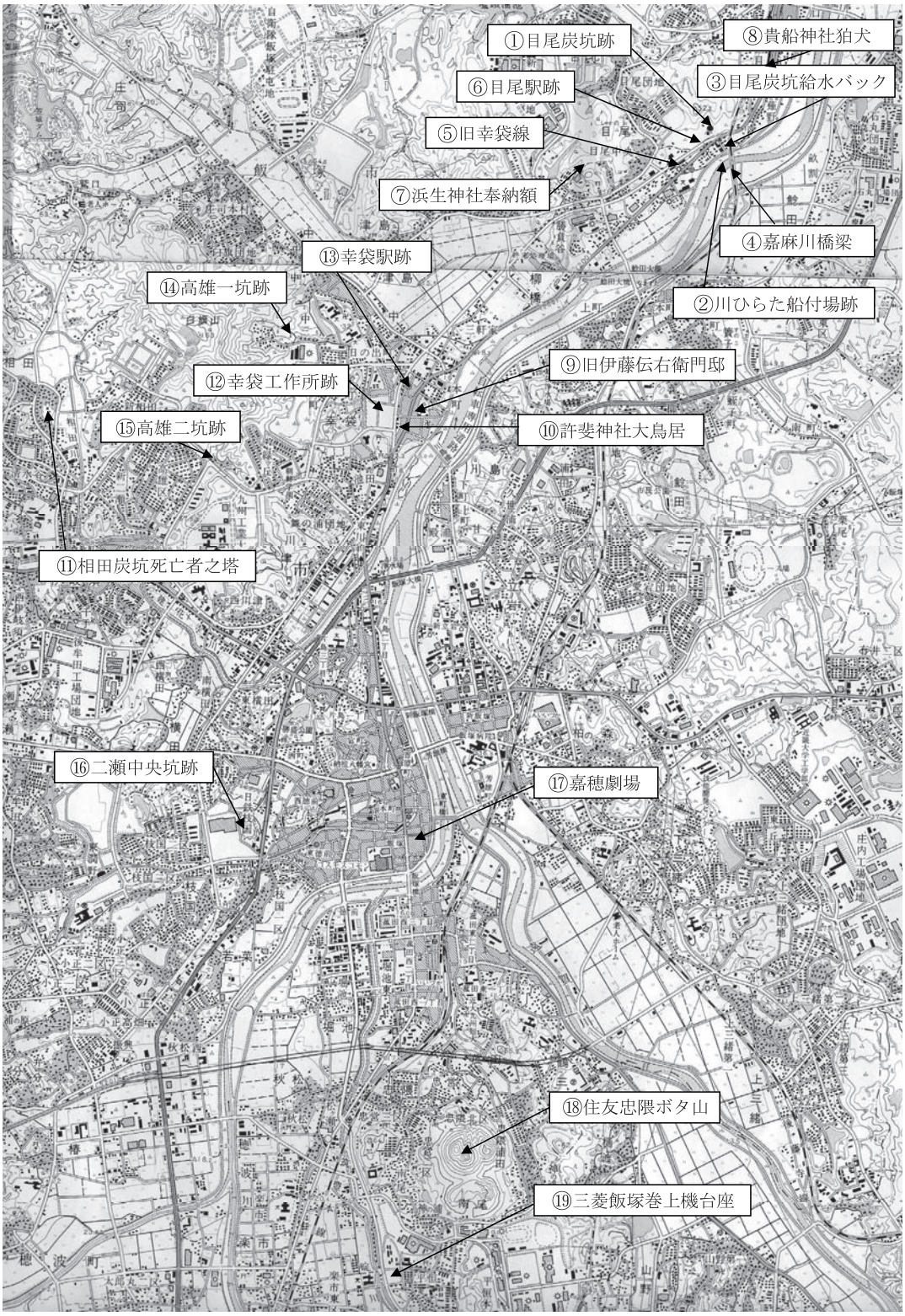
（11）吉原政道：長崎県下及福岡県下炭山報告、工學會誌、第六三巻、一八八七年、一七八頁～一八一頁

（12）杉山徳三郎：開坑当時の苦難、石炭時報、第二巻、一九二七年、四一頁

（13）直方市：「直方市史補巻 石炭鉱業編」、一九七七年、一〇〇頁～一〇一頁、一〇八頁～一〇九頁

（14）筑豊石炭鉱業會：「筑豊石炭鉱業會五十年史」、一九二一年、五頁

（15）朝日新聞西部本社：「石炭史話」、一九七〇年、二二頁～二五頁



目尾炭坑跡・旧伊藤伝右衛門邸付近の関連近代化遺産位置図

筑豊炭田の近代化に貢献した事績年表（明治期）

西暦	和暦	筑　豊　炭　田	そ　の　他
1868	明治元		
1869	2	鉱山開放令	高島炭坑で蒸気ポンプ使用
1870	3		
1871	4		
1872	5	鉱山心得書	
1873	6	日本坑法発布	
1874	7		
1875	8	片山逸太糸田村で蒸気ポンプ排水実験失敗	
1876	9	貝島太助、2900円で蒸気機関購入、直方炭坑に設置失敗	
1877	10		
1878	11	帆足義方、香月炭坑蒸気ポンプ据付失敗	
1879	12		三池炭坑大浦坑、蒸気ポンプ使用
1880	13	杉山徳三郎目尾炭坑でポンプ試用成功	
1881	14	杉山徳三郎目尾炭坑でポンプ揚水成功、機械巻揚機	
1882	15	改正日本坑法発布	
1883	16		
1884	17		
1885	18	筑前国豊前国石炭坑業組合成立	
1886	19		
1887	20	旧蔵内家住宅、築上町に建築　・出炭41万トン	
1888	21	筑豊五郡を34区に撰定坑区発表実施、若松築港㈱創立事務所	
1889	22	三菱鯰田炭坑長壁式採炭法実施、門司港特別輸出港指定	
1890	23	若松築港㈱設立	
1891	24	筑豊興業鉄道開通（若松～直方間）	
1892	25	・出炭104万トン	
1893	26	筑豊石炭鉱業組合設立	
1894	27		
1895	28	豊州鉄道、伊田～行橋間開通	
1896	29	幸袋工作所創立（社長伊藤伝右衛門）	
1897	30	八幡製鐵所開庁、旧伊藤伝右衛門邸建築　・出炭272万トン	
1898	31	古河下山田火力発電機設置、筑豊で初めて設置	
1899	32	製鉄所二瀬出張所設置、安川・松本高雄炭坑を八幡製鐵譲渡	
1900	33	直方鉄工業組合、三菱上山田炭坑で電気ポンプ初めて使用	
1901	34	八幡製鐵所操業開始	
1902	35	・出炭493万トン	
1903	36	タービンポンプ古河塩頭炭坑で初めて使用	
1904	37	若松港特別輸出港指定	
1905	38	鉱業法公布	
1906	39	遠賀川大改修開始（10年計画）国会承認	
1907	40	・出炭693万トン	
1908	41	三井田川伊田竪坑第一・第二煙突完成、三菱方城第二竪坑完成	
1909	42	三井田川伊田第一竪坑完成、旧松本健次郎邸（日本館）完成	
1910	43	旧松本健次郎邸（洋館）完成、三井田川伊田第二竪坑完成	
1911	44	製鉄二瀬炭鉱中央竪坑完成　・出炭871万トン	

(16) 永末十四雄：「筑豊――石炭の地方史」、日本放送協会出版、一九七三年、五八頁～六一頁

(17) 長弘雄次：筑豊の石炭鉱業について、嘉飯山郷土研究会、第一一号、一九九七年、一一一頁

(18) 佐谷正幸：石炭採掘技術の変遷、嘉飯山郷土研究会、第一四号、二〇〇〇年、四一頁

(19) 筑豊近代遺産研究会編：「筑豊の近代化遺産」、弦書房、二〇〇八年、三二頁～三三頁、一九八頁

(20) 筑豊近代遺産研究会・北九州地域史研究会編：「北九州・筑豊の近代化遺産一〇〇選」、弦書房、二〇〇九年、三八頁、五一頁